

## 同窓会について

奥山 格

同窓会は多感な青春の時期に共通の体験をもった者たちの集まりであり、生涯の絆を作るものでありましょう。同じ学校の出身グループの人脈はややもすると学閥というような否定的なトーンで語られることもあります。言葉少なくして互いに理解し合える仲間として、人のつながりの根幹を作るものとして大切にしたいものです。

自由な実力主義の国とみなされている米国でも、大学の同窓のつながりには非常に強いものがあり、母校愛にはなみなみならぬものがあるようです。私が1年間研究員として過ごしたテキサスの州立大学でさえ、30年以上たった今でも年1回の同窓会ニュースレターを送ってきます。毎年秋の一日にホームカミングデーとして、卒業生たちが母校に帰ってきて、町をあげての祭日のようになります。その日には大学のフットボール試合で盛り上がり、盛大なパレードを行い、大学の各グループが趣向をこらしたフロートで参加します。

また米国社会では寄付行為が大いに奨励されます。キャンパスには個人名のついたビル（校舎や学生寮）がよく見られます。定常的に特定分野の研究のために寄付すると、冠講座ができ個人名の冠称号のついた教授が任命されます（このような給料と研究費が特別についた恵まれた教授席には著名な教授が就きます）。奨学金の寄付も多く、個人名のついた奨学財団は日本でもありますが、同窓会が主導的に奨学金を集めています。同窓会ニュースレターには、後輩の奨学金のためにドネーション（寄付）を募る記事が常にあり、寄付金リストと新しい奨学生の写真が載っていたりします。少しまとまった寄付ができれば1人の学生のために自分の名前の就いた奨学金を援助することもできます。わが理学部にも、とくに留学生のための奨学基金があるといいですね。このようなことも同窓会活動として考えられないでしょうか。